

古代、中世に栄えた猿投窯

猿投窯（^{さなげよう}猿投山西南麓古窯跡群）は5世紀から14世紀にかけて展開された古代最大の窯業地帯である。その範囲は名古屋市東山あたりから日進市、東郷町、みよし市、豊田市西部まで及び豊明市、刈谷市、大府市の一部にまたがる約20km四方の地域で、約2000基以上の窯があったとされる。とくにみよし市は数多くの窯跡が確認された。



それまでの土器との違いは「あな^{がま}窯」で焼いたことである。斜面に穴を掘り密閉した状態で焼くことにより、焼成温度が高くなり、より硬く強度の高い良質の陶器になる。釉薬、製作技法等で須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗の4種類に分類される。

ここは、みよし市指定史跡として保存され見学できる。



K27号窯（9世紀）現存する唯一のあな窯「市指定史跡」



す え き 須恵器

猿投窯の源流で、5世紀ごろ朝鮮半島から伝来した技術で焼いた器で縄文土器、弥生土器とは異なる系統の焼き物である。

古墳時代には主に祭祀具、副葬品として使われていたが、奈良時代になると食器にも使われるようになった。みよしでは8～9世紀を中心に生産された。

右の多口瓶は人工の釉薬をかけたのではなく、窯の中の灰がまい上がって器に降りかかり、それが溶けて須恵器が灰釉陶器と同じような状態になったものである。



K36号窯で出土した多口瓶
『国の重要文化財』8世紀末のもの
(愛知県陶磁美術館蔵)



K37号窯（9世紀）より出土の
灰釉陶器の長頸瓶
(みよし市立歴史民俗資料館蔵)

かいゆうとう き 灰釉陶器

9世紀の初めみよしで発明された。植物の灰を水でとかけた釉薬を陶器に塗り、高温（1200度以上）で焼くことで鮮やかな淡緑色に発色させた焼き物である。中国の青磁を模倣したとされる。当時の最高級品として貴族たちの間で人気商品となり大切に使われた。

みよしで生産された灰釉陶器は質が良く、高級品として都や全国各地の官庁、寺院に運ばれた。しかし、需要が高まると次第にたくさん生産されるようになり、品質も落ちていき、11世紀にはほとんど生産されなくなった。



K90号窯（9世紀）で出土した灰釉陶器の底に内置所^{ないじしよ}の文字がある。
内置所とは平安時代の役所の一部で、そこで使用される予定であった。
（愛知県陶磁美術館蔵）



K18号窯（9世紀）より出土の灰釉陶器の平瓶^{へいびい}
（みよし市立歴史民俗資料館蔵）

りよくゆうとうき
緑釉陶器



K90号窯（9世紀）市指定史跡で出土された緑釉陶器
 素地に花の模様が描かれている
 （愛知県陶磁美術館蔵）

緑釉陶器は7世紀後半から作られ、光沢のある緑色のガラス化した釉薬が施された陶器である。製作技法としてまず焼物本体である素地を焼成する。焼き締まった素地に鉛を基本とした釉薬を塗り、再度低温（800度前後）で焼成する。

もう一つの特長として表面に花や蝶などの文様が描かれている陶器が多く出土されている。中国の陶磁器や金属器などの文様をモデルとしたものとみられる。猿投窯では9世紀から11世紀にかけて作られた。当時は高度な技術を要する高級な焼物として、都はもちろん全国に流通していた。



K30号窯（10世紀）より出土の緑釉陶器
 （みよし市立歴史民俗資料館蔵）

古代、中世に栄えた猿投窯

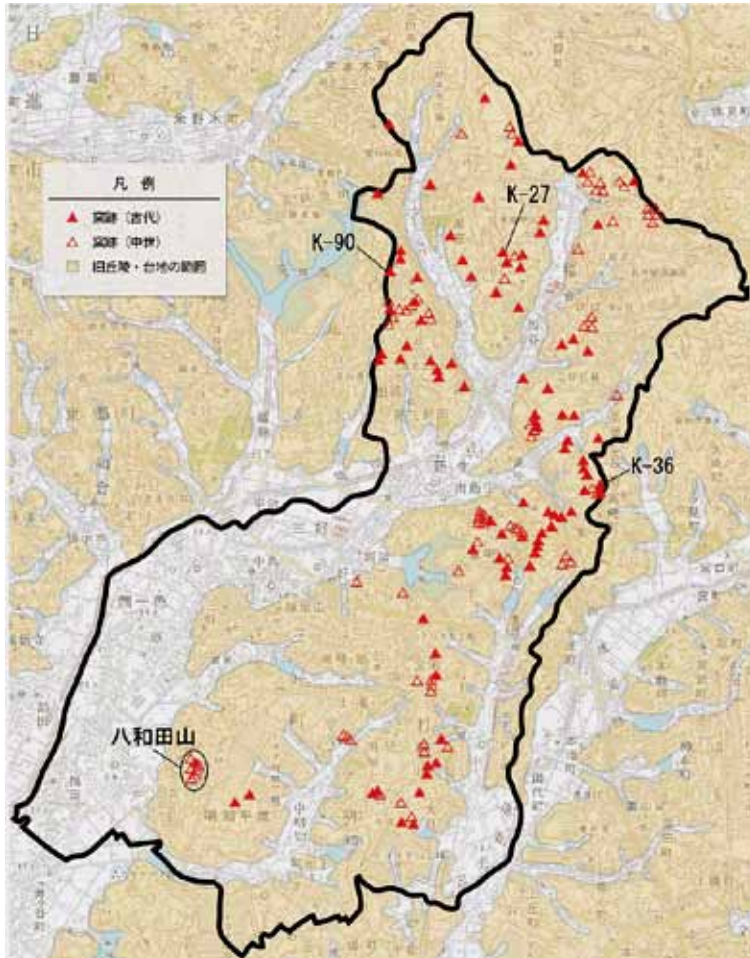
やまぢやわん
山茶碗

平安時代末期から室町時代（12～14世紀）にかけて、庶民向けの日常雑器として大量に作られた。釉薬はかけておらず、粗雑な作りになっている。

みよしでは12世紀中から14世紀初めまで生産された。5世紀の須恵器生産から始まった猿投窯は14世紀初めの山茶碗を最後に900年の歴史に幕を下ろした。



八和田山古窯跡群より出土
(みよし市立歴史民俗資料館蔵)



みよし市窯跡分布調査図